

2025 年度 研究センター事業報告書

研究センター名	間文化現象学研究センター
---------	--------------

I. 研究成果の概要（公開項目） ※1ページ以内にまとめること

本欄には、研究センターの実施した全ての研究の成果について、その具体的内容、意義、重要性等を、項目立てなどをおこないでできるだけわかりやすく記述してください。

2025 年度は以下のさまざまな企画を実施することにより、非常に充実した研究活動を遂行できた。

まず、以下の複数の国際ワークショップを開催することで、国際的研究ネットワークの構築を積極的に進めることができた。

(1)国際ワークショップ「デリダと日本-東アジアの哲学」(2025 年 5 月 31 日)では、Steve Lofts 氏、Hector Castano 氏など国内外の6名の研究者が集い、デリダと日本哲学、東アジアの思想との関係をめぐって議論した。

(2)国際シンポジウム A Tribute to Phenomenology (2025 年 12 月 5、6、8 日)では、香港中文大学・元教授の張燦輝氏、東京大学の張政遠氏と連携して、香港現象学会との共催で国際シンポジウムを企画し、国内外より著名な現象学研究者を多数招聘して3日間の会議を開催した。

(3) 国際シンポジウム「20 世紀哲学における唯物論的弁証法の展望——フランスと日本、そして両者の媒介としてのジャン・デュク・タオ」(2026 年 2 月 20 日)は、中山大学との共同研究として、京都大学人文科学研究所との共催で、フランスのアラン・パトリク・オリヴィエ氏、台湾の黃雅嫻氏などを招聘して国際シンポジウムを開催した。以上の成果は、英語やフランス語での刊行を準備しており、海外への成果発信にもつながる。

次に、以下の複数の海外研究者を招聘した講演会を開催することで、さらなる海外交流も進めた。

(4)エマニュエル・アロア教授講演会(2025 年 6 月 2 日)では、アロア氏が「見えるものの発明する能力——メルロ＝ポンティ、間動物性の美学」というタイトルで講演した。

(5)Basil Vassilicos 氏講演会(2025 年 7 月 31 日)では、Vassilicos 氏が「知覚の解体と現象的ノイズ」というタイトルで講演した。

(6)第 1 回東アジア間文化現象学講演会(2025 年 10 月 26 日)では、招聘した劉暢氏(上海、復旦大学哲学院)が、「哲学の二つの根——メタ哲学的考察」というタイトルで講演した。

(7)Indefinite Life between Heidegger and Derrida(2026 年 3 月 13 日)では、Adam R. Rosenthal 氏がデリダとハイデガーについての講演をおこなった。

さらに、若手研究者が主導する企画を2つ開催し、若手研究者の育成につながった。

(8)若手ワークショップ「ナンシー『無為の共同体』の複層性」(2025 年 5 月 24 日)では、若手研究者3名の企画により、ジャン＝リュック・ナンシーの哲学をめぐるワークショップを開催した。

(9)ワークショップ「うんこの哲学」(2026 年 3 月 22 日)は、大学院生の企画により開催されたもので、さまざまな哲学的観点から人間における排泄の意味を議論した。

また、『人文科学研究所紀要』第 145 号(2026 年 1 月刊行)において、2024 年度の成果を以下3点の小特集として掲載した。

小特集 1: 第 4 回東アジア間文化現象学会議

小特集 2: 「われわれ」と「不気味な他者」

小特集 3: ジャック・デリダの講義録——「思考すること、それはノンと言うことである」を読む——

Ⅱ. 拠点構成員の一覧（公開項目）※ページ数の制限は無し

本欄には、2026 年 3 月 31 日時点で各拠点にて所属が確認されている本学教員や若手研究者・非常勤講師・客員研究員等の構成員を全て記載してください。区分が重複する場合は二重に記入せず、役割が上にあるものから優先し全て記載してください。また、若手研究者の条件に当てはまる場合は、必ず若手研究者欄に記載をしてください。

※若手研究者とは、立命館大学に在籍する以下の職位の者と定義します。

①専門研究員・研究員、②補助研究員・RA、③大学院生、④日本学術振興会特別研究員(PD・RPD)

役割		氏名	所属	職位
センター長		鈴木 崇志	文学部	准教授
運営委員		加國 尚志	文学部	教授
		亀井 大輔	文学部	教授
		林 芳紀	文学部	教授
		永守 伸年	文学部	准教授
		大西 琢朗	文学部	准教授
学内教員 (専任教員、研究系教員等)		石原悠子	グローバル教養学部	准教授
		神島裕子	総合心理学部	教授
		長澤麻子	文学部	教授
		日暮雅夫	産業社会学部	特任教授
学内の若手研究者	専門研究員 研究員 初任研究員	有村 直輝	衣笠総合研究機構	専門研究員
		柳川 耕平	衣笠総合研究機構	専門研究員
	補助研究員・リサーチアシ スタント	若杉 直人	文学研究科	博士課程後期課程 (NEXT 学生フェロー ー)
		堀内 智吉	文学研究科	博士課程後期課程
	大学院生	砂川 優斗	文学研究科	博士課程前期課程
		西村 紗貴乃	文学研究科	博士課程前期課程
	学振特別研究員 (PD・RPD)	小田 麟太郎	衣笠総合研究機構	特別研究員
		佐藤 愛	青山学院大学	特別研究員
その他の学内者 (非常勤講師・研究生・研修生等・ 博士前期課程院生等)		谷 徹	文学部	名誉教授
		青柳 雅文	文学部	非常勤講師
		田邊 正俊	文学部	非常勤講師
		浅沼 光樹	文学部	非常勤講師
		神田 大輔	文学部	非常勤講師
		松葉 祥一	文学部	授業担当講師
		宮原 優	文学部	非常勤講師
客員協力研究員		Michel DALISSIER	金沢大学	准教授
		ジャンネル、ロマリク	Collège international de philosophie・(「国際哲学コレ ージュ」)	Directeur de programme
		安井 絢子	関西大学 文学研究科	特別研究員
		伊藤 潤一郎	新潟県立大学	講師

	丸橋 裕	京都大学	非常勤講師
	紀平 知樹	兵庫県立大学	教員
	吉川 孝	甲南大学	教授
	宮崎 裕助	専修大学	教授
	古怒田 望人	工学院大学	非常勤講師
	黒岡 佳粧	中国福建省・福州大学	副教授
	佐々木 拓	金沢大学	教授
	佐藤 勇一	大東文化大学	准教授
	小西 真理子	大阪大学	准教授
	神崎 宣次	南山大学	教授
	西山 雄二	東京都立大学	教授
	川崎 唯史	東北大学病院	特任講師
	川瀬 雅也	神戸女学院	教授
	丹羽 一晃	立命館大学	客員協力研究員
	池田 喬	明治大学	教授
	中澤 栄輔	東京大学	講師
	中澤 瞳	日本大学	准教授
	藤木 篤	芝浦工業大学	准教授
	堀田 義太郎	東京理科大学	准教授
	本郷 均	東京電機大学	教授
	門屋 秀一	門屋美術研究所	所長
	廖 欽彬	中国・中山大学哲学系	専任教授
	廣瀬 浩司	筑波大学	教授
	蛭子 良風	衣笠リサーチオフィス	個人授業主
	郷原 佳以	東京大学	教授
	長坂 真澄	早稲田大学	教授
	柿木 伸之	西南学院大学	教授
その他の学外者 (他大学教員・若手研究者等)			
センター構成員 計56名 (うち学内の若手研究者 計 8名)			

Ⅲ. 研究業績（公開項目） ※ページ数の制限は無し ※to be published,の状態の業績は記載しないで下さい。
 本欄には、「Ⅱ. 拠点構成員の一覧」に記載した研究者の研究業績のうち、拠点に関わる研究業績を全て記載してください(2026年3月31日時点)。

1. 著書							
No.	氏名	著書・論文等の名称	単著・共著の別	発行年月	発行所、発表雑誌（及び巻・号数）等の名称	その他編者・著者名	担当頁数

1	宮崎裕助	〔インタビュー〕 私たちの世界には根本的に幽霊がいる——デリダ研究者から見たマーク・フィッシャー	単著	2025 年 12 月	P ヴァイン『ポピュラー文化がラディカルな思想と出会うとき——マーク・フィッシャーとイギリス現代思想入門』	仲山ひふみ + e-leking 編集部	PP. 126～147
2	宮崎裕助	〔翻訳〕 エドワード・ベアリング「デリダ、レヴィ＝ストロース、『分析手帖』、あるいは、いかにしてよき構造主義者となるか」、『分析手帖——概念と形式 第二巻』	共著	2026 年 3 月	以文社	佐藤嘉幸・坂本尚志（監修）	PP. 78～114
3	丹羽一晃	環境思想家としての鶴見和子	単著	2026 年 2 月	晃洋書房		PP. 1～176
4	丹羽一晃	『共に生きるための国際文化学：文化と文化をつなぐ第一歩』第 7 章 環境・災害と文化 [7-3] 文化と環境思想【鶴見和子と人間以上の世界】	共著	2026 年 1 月	昭和堂	日本国際文化学会（編）	PP. 230～231
5	紀平知樹	リアリティの哲学Ⅱ	共著	2026 年 3 月	中央大学出版部	寺本剛	PP. 295～329
6	郷原佳以	カトリヌ・マラブーの哲学——脱構築の可塑性——	共著	2025 年 10 月	読書人	西山雄二（編著）カトリヌ・マラブー（著）、他	PP. 145～156
7	長坂真澄	『存在の彼方へ』を解説する：レヴィナス研究の現在	共著	2025 年 12 月	法政大学出版局	佐藤香織、馬場智一（編）	PP. 126～144
8	柿木伸之	ベンヤミン 破局の後に生き残る思想	単著	2025 年 12 月	青土社	なし	PP. 1～304
9	吉川孝	合理性と非合理性の哲学	共著	2025 年 12 月	丸善出版	長田怜（編）、吉良貴之、日笠晴香（著）	PP. 1～47
10	谷 徹	「事象そのものへ——あいだの現象学」、『精神医学と哲学のあいだ——木村敏が考えたこと』	共著	2025 年 7 月	創元社	芝伸太郎、野家啓一（編）	PP. 29～64.
11	谷 徹	「哲学と精神医学が出会う時——知性と精神」、『臨床と哲学のあいだ——木村敏とドイツの現象学・人間学』	共著	2026 年 1 月	晃洋書房	清水健信（編）	PP. 31～62.
12	Takashi Ikeda	Martin Heidegger, <i>The Palgrave Encyclopedia of Theoretical and Philosophical Psychology</i>	共著	2026 年 3 月		Thomas Teo (ed.)	PP. 1～10
13	Romarc Jannel	〔翻訳〕 新・共生主義宣言——共生主義か、さもなくば野蛮か——	共著	2026 年 3 月	地球システム・倫理学会	共生主義者連合（著）、青木三郎（共訳）	PP. 1～39
14	廖欽彬	越境する知としての西田哲学	共著	2025 年 12 月	京都大学出版会	秋富克哉・福家崇洋（編）	PP. 69～85
15	廖欽彬	甦る田辺哲学——田辺元生誕 140 周年記念論集	共著	2025 年 12 月	法政大学出版局	張政遠、福家崇洋（編）	PP. 48～167、320～327
16	廖欽彬	『〈無常〉の変相と未来観——その視界と国際比較』	共著	2026 年 3 月	思文閣出版	荒木浩（編）	PP. 113～137
17	松葉祥一	〔翻訳〕 美学における居心地の悪さ	共著	2025 年 7 月	インスクリプト	ジャック・ランシエール（著）、椎名亮輔（共訳）	PP. 1～240
18	鈴木崇志	〔翻訳〕『改造』論文集成：革新の現象学と倫理学	共著	2025 年 5 月	講談社	エトムント・フッサール（著）、植村玄輝、八重樫徹、吉川孝（共著）	PP. 1～395
19	佐藤愛	ヴァーチャルに治癒される人間——サイバー心理学が問う新たな主体	共著	2025 年 4 月	誠信書房	セルジュ・ティスロン、フレデリック・トルド（著）、阿部又一郎、縣由衣子（共訳）	PP. 1～350

2. 論文								
No.	氏名	著書・論文等の名称	単著・共著の別	発行年月	発行所、発表雑誌、巻・号数	その他編者・著者名	担当頁数	査読有無
1	有村直輝	文献紹介「シェリング以後の自然哲学」の別の可能性——メルロ＝ポンティ、ホワイトヘッドへ	単著	2025年4月	青土社、『現代思想』、53（8）		PP. 310～322	無
2	有村直輝	「自由と秩序」草稿における想像力の概念について——あるロマン主義的系譜との距離——	単著	2025年12月	日本ホワイトヘッド・プロセス学会、『プロセス思想』、25巻		PP. 117～135	有
3	西山雄二	Deconstruction as the Thinking of Secret	単著	2025年7月	Filosofiya-Philosophy, 34(2)		PP. 182～195	無
4	西山雄二	The Creative and Sinister Power of Lying: The Philosophy and Politics of Falsehood	単著	2025年12月	Critique & Humanism, 63(2)		PP. 261～272	無
5	西山雄二	アウフヘーブンクと差延——ヘーゲルを読むナンシーとデリダ	単著	2026年3月	Limitrophe、10号		PP. 176～183	無
6	Romarie Jannel	Trustability and trustworthiness: conceptual foundations and the case of AI	共著	2025年12月	AI and Ethics, 6(13)	Jonathan Tallant	PP. 1～13	有
7	Romarie Jannel	Déplacer, décentrer, décaler	共著	2025年12月	Rue Descartes, 2025/HS1	Hugues Choplin, Héctor G. Castaño, Nishiyama Yuji	PP. 89～101	有
8	Romarie Jannel	Society and Environmental Crisis: A Tribute to Imanishi Kinji and Augustin Berque	単著	2025年11月	The Bulletin of the Japan Society for Global System and Ethics, 20		PP. 171～176	有
9	廖欽彬	「京都学派と中国シュトラウス派から考えるリベラル・アーツ」		2025年4月	『EAA ブックレット』、第37号		PP. 5～16	無
10	廖欽彬	「東アジア哲学成立の可能性」		2025年6月	『人文学報』、第123号、京都大学人文科学研究所紀要		PP. 41～55	有
11	廖欽彬	「日本思想と近代超克論：丸山真男と京都学派の交鋒」		2025年	『文化と伝播』2025年第3期		PP. 59～65	有
12	廖欽彬	「中国哲学のコンテクストにおける本体論と形而上学」	共訳	2025年12月	『求真』、第30号	鄭開（著）、河合一樹・王晓亮（共訳）	PP. 1～21	有
13	鈴木崇志	思い込みと出会い：廣松渉とフッサールの他者論の比較	単著	2026年1月	『立命館大学人文科学研究所紀要』第145号		PP. 93～113	有
14	丸橋 裕	ヴィクトーア・フォン・ヴァイツゼッカーにおける間主体性への接近の試み	単著	2026年1月	晃洋書房	編者 清水健信	PP. 63～94	無
15	丸橋 裕	書評：André Laks, Plato's Second Republic. An Essay on the Laws.	単著	2026年3月	西洋古典学研究 LXXIII	日本西洋古典学会	PP. 110～112	無
16	Yusuke Miyazaki	Blindness and Insight of Reading:	単著	2025年6月	Filosofiya-Philosophy, vol.34, no.2		PP. 217～230	有

		Deconstruction Between Jacques Derrida and Paul de Man						
17	宮崎裕助	誰がスピノザを恐れているのか——超越論哲学／デリダのスピノザ忌避について	単著	2025年6月	スピノザ協会『スピノザーナ』第19号		PP. 58～75	有
18	宮崎裕助	亡命言語としての母語——ハンナ・アーレントと言語の複数性	単著	2026年1月	青土社『現代思想』第54巻・第3号		PP. 260～274	無
19	宮崎裕助	ロゴス中心主義なき音声中心主義——デリダ、柄谷行人、脱構築の普遍性	単著	2026年3月	脱構築研究会『Suppléments』第5号		PP. 47～63	無
20	堀内智吉	〔翻訳〕「文化の哲学」における歴史的課題：京都学派の読解を通じて	単訳	2026年1月	立命館大学人文科学研究所、人文科学研究所紀要、145巻	スティーブン・ロフツ	PP. 115～139	無
21	堀内智吉	〔書評〕鈴木崇志「フッサール入門」	単著	2026年3月	立命館大学哲学会、立命館哲学、37巻		PP. 55～63	無
22	青柳雅文	アドルノのマンハイム論	単著	2026年1月	立命館大学人文科学研究所『立命館大学人文科学研究所紀要』145号		PP. 345～362	有
23	加國尚志	錯綜体、潜在性-市川浩身体論再考	単著	2026年1月	立命館大学人文科学研究所、立命館大学人文科学研究所紀要、3巻4号		PP. 362～383	有
24	紀平知樹	観光における「滞在」の不可能性と可能性——Heideggerの旅行記から	単著	2025年9月	観光学術学会、『観光学評論』、13巻・2号		PP. 103～118	有
25	郷原佳以	分泌の光景へ——「テキスト「ミレイユ・カル＝グリュベール」の教え	単著	2026年3月	立教大学フランス文学研究室、立教大学フランス文学、55号		PP. 99～110	無
26	郷原佳以	「散種」と粹の問題・序説	単著	2026年1月	東京大学大学院総合文化研究科言語情報科学専攻、言語・情報・テキスト、32号		PP. 17～32	無
27	郷原佳以	現在の憑依——岡崎乾二郎の「わたし」	単著	2025年7月	青土社、ユリイカ、57巻9号		PP. 366～376	無
28	郷原佳以	ジャック・デリダ『死刑Ⅱ』翻訳	共訳	2026年2月	白水社	西山雄二・佐藤嘉幸・工藤顕太・佐藤朋子	PP. 77～134	無
29	長坂真澄	暴力に対する抵抗と身体の変容 エルザ・ドルランの餌食の現象学を端緒として	単著	2025年10月	日本現象学会、現象学年報、41号		PP. 1～14	無（招待有）
30	長坂真澄	現象学のシェリング的転回——リシールによる『人間的自由の本質』読解より	単著	2025年10月	岩波書店、思想、1219号		PP. 121～136	無（招待有）
31	長坂真澄	L'auto-affection chez Kant selon Benoist - comme indice pour comprendre la critique lévinassienne de Heidegger	単著	2025年9月	レヴィナス協会、レヴィナス研究、7号		PP. 31～40	無（招待有）
32	長坂真澄	存在についての思惟と無限についての思惟——デリダ「暴力と形而上学」におけるスコトゥス言及をめぐって——	単著	2025年6月	京都ユダヤ思想学会、京都ユダヤ思想、16号		PP. 31～56	有

33	中澤栄輔	Neuroethics Rounds: Place- Sensitive Approaches for Daily Interfaces of Neuroscience- Neuroethics Ecosystems	共著	2025 年 4 月	The American Journal of Bioethics Neuroscience. 16(2)	Ino H, Takimoto Y	PP. 115～ 118	有
34	中澤栄輔	From Technocracy to Democracy: The Need for Another Translational Justice	共著	2025 年 6 月	The American Journal of Bioethics Neuroscience. 25(6)	Yamamoto K, Ibuki T	PP. 48～50	有
35	中澤栄輔	Ethical, legal, social, and cultural implications of the non-clinical use of transcranial direct current stimulation (tDCS) in Korea and Japan	共著	2025 年 8 月	Neuroscience Research 2025 Aug 6; 219:	Choi S, Jwa AS, Shim J, Kim S, Eom J, Takimoto Y, Nakazawa E, Ryu YJ	104951	有
36	柿木伸之	未成の青春—クリ ストフ・フリードリ ヒ・ハインレの詩と その断絶が問いか けるもの	単著	2025 年 9 月	西南学院大学国際文化学部 『国際文化論集』第 40 巻第 1 号		PP. 185 ～ 242	無
37	柿木伸之	中断としての終末 —ベンヤミンの終 わりへの問い	単著	2025 年 10 月	青土社『現代思想』		PP. 167 ～ 178	無
38	柿木伸之	柿木伸之「人間の彼 方からうたう—破 局からの詩学のため に」	単著	2026 年 3 月	形象論研究会『形象』第 7 号		PP. 59～81	無
39	亀井大輔	デリダの終末論的思 考—「終わり」から 「出来事」へ	単著	2025 年 11 月	現代思想。53(14)		PP. 194 ～ 203	無
40	亀井大輔	痕跡・贈与・正義— ハイデガーを追うデ リダ—	単著	2026 年 1 月	立命館大学人文科学研究紀 要、145 号		PP. 23～39	有
41	亀井大輔	デリダとガダマーの 「ハイデルベルク会 談」を読む	単著	2026 年 3 月	ガダマー研究、2 号		PP. 14～27	無
42	亀井大輔	「いき」と「ゲシュレ ヒト」—ハイデガ ー、九鬼、デリダ	単著	2026 年 3 月	脱構築研究会、Suppléments、 5 号		PP. 36～46	無
43	亀井大輔	カトリーヌ・シャリ エ『無限者の痕跡： エマニュエル・レヴ ィナスとヘブライ的 源泉』をめぐって— デリダ、ハイデガー、 レヴィナス研究から—	共著	2026 年 3 月	富山大学教養教育院紀要、7 号	佐藤香織，山本英 輔，横地徳廣	PP. 59～81	有
44	黒岡佳旺	「決まり文句」の暴 力に対する思考の役 割—アレントとハ イデガー	単著	2026 年 1 月	立命館大学人文科学研究 『立命館大学人文科学研究 紀要』No.145		PP. 383 ～ 406	有
45	佐藤愛	『精神分析の系譜』 再読—失われた始 源から喪失による生 へ	単著	2025 年 9 月	ミシェル・アンリ研究、15 号		PP. 17～27	無
46	日暮雅夫	「日本におけるフラ ンクフルト批判理論 の受容と展開（2）」	単著	2025 年 4 月	『市民科学通信』 04/2025/No.59、発行 NGO 市 民科学京都研究所発行	照井日出喜	PP. 29～34	無

47	日暮雅夫	「日本におけるフランクフルト批判理論の受容と展開（3）」	単著	2025年5月	05/2025/No.60、発行 NGO 市民科学京都研究所発行	照井日出喜	PP. 66～71	無
48	M.ジェイ、 翻訳・解題 日暮雅夫	「フランクフルト学派の歴史を拡張された場に置く」	単著	2025年7月	『思想』2025年7月号 No.1215、岩波書店、		PP. 44～57	有
49	日暮雅夫	「戦争責任をめぐる二つの歴史論争——批判理論から見た戦後民主主義——」	単著	2026年3月	『立命館産業社会論集』第6巻 第4号		PP. 65～77	有

3. 研究発表等					
No.	氏名	発表題名	発表年月	発表会議名、開催場所	その他発表者名
1	有村直輝	自然は想像力そのもの—E. D. フォーセットのイマジニズムとホワイトヘッド哲学との接点—	2025年10月	日本ホワイトヘッド・プロセス学会第47回全国大会、中央大学	
2	佐藤勇一	メルロ＝ポンティ哲学のマルロー読解をめぐって——1940年代後半を中心に	2025年9月	メルロ＝ポンティ・サークル第31回大会、東北大学	
3	西山雄二	La bête et l'hôte : L'hospitalité de l'île »,	2025年6月	Déconstruction·Hospitalité. Expérience(s) des frontières, Université Paris Nanterre	
4	Romarc Jannel	“An Experience of Going Through the Untranslatable: Aufhebung, différance and awai”	2025年4月	Philosophy as Translation. Philosophical and Educational Perspectives, 京都大学	
5	Romarc Jannel	Toward a Dispassionate Philosophy of AI”	2026年2月	International Online Session “Human Society and AI – How is our Co-Existence possible based on Irrefutable Truth and General Good?”, “KoPhil” Vienna and The Japan Society for Global System and Ethics, オンライン	
6	Romarc Jannel	La phénoménologie dialectique de Trần Đức Thảo et son objet	2026年2月	International Symposium, 「二十世紀哲学における物論的弁証法の展望フランスと日本、そして両者の媒介としてのチャン・デュク・タオ」, 立命館大学	
7	Romarc Jannel	自然の余白と美の倫理学発表: シーズン・ラオ (Season Lao) の作品における場のもの	2025年11月	地球システム・倫理学会 第21回学術大会、国際ファッション専門職大学	
8	Romarc Jannel	Trust and Local Specificity in Environmental Ethics	2025年10月	Tsukuba Conference For Future Shapers 2025, Tsukuba University	
9	Romarc Jannel	Natural Emptiness and Co-emergence — A Philosophical Dialogue on the Art of Season Lao	2025年9月	Workshop for Atmospheric Studies: “Aesthetics of qi/ki and Atmosphere: Steps towards East Asian Possibilities”, Kobe University	
10	Romarc Jannel	絶対無の可能性——形而上学と倫理の架橋	2025年6月	Eighth World Conference of the International Association for Japanese Philosophy, 東京大学	
11	Romarc Jannel	A Footnote to Derrida	2025年5月	Workshop: Derrida and Japanese-Asian Philosophies, Ritsumeikan University	
12	Yusuke Miyazaki	Phonocentrism without Logocentrism: Jacques Derrida's Response to Kojin Karatani's “Nationalism and	2025年5月	ワークショップ「デリダと日本・東アジアの哲学」、立命館大学衣笠キャンパス	立命館大学・間文化現象学研究センター／人文科学研究所

		Écriture”			
13	宮崎裕助	触覚「なるもの」は存在しない——ジャック・デリダ『触覚、ジャン＝リュック・ナンシーに触れる』をめぐって	2025 年 10 月	シンポジウム「フランス哲学における「現れないものの現象学」再考」、秋田大学、手形キャンパス	東北哲学会
14	宮崎裕助	アリストテレスの共通感覚論——ダニエル・ヘラー＝ローゼン『内的触覚』第 2～3 章にそくして	2025 年 11 月	第 1 回共通感覚研究会、神戸駅前 AT ビル 10 階 コワーキングスペース Suki_ma(スキマ)	共通感覚研究会
15	宮崎裕助	三木清『構想力の論理』における技術の脱構築／脱構築の技術	2025 年 12 月	ワークショップ「三木清『構想力の論理』を読む——技術論を中心に」、専修大学	脱構築研究会、専修大学哲学会
16	宮崎裕助	カントの理念とその使用のアポリア	2025 年 12 月	カント研究会第 382 回例会「宮村悠介著『カント「人倫の形而上学」の生成——理念論の道をたどる』合評会」法政大学大学院棟	カント研究会
17	堀内智吉	普遍的道德への懐疑——デュルケムのカント批判をもとに	2025 年 9 月	科研費「ハイデッガーの歴史性概念に基づく自己と共同体の理論の構築」に関する第 4 回研究会、立命館大学	
18	堀内智吉	定言命法の陥穽——デュルケムのカント批判から	2025 年 10 月	日本倫理学会、東北大学	
19	堀内智吉	うんこはなぜ隠されるのか——人の尊厳をめぐる問題について	2026 年 3 月	ワークショップ「うんこの哲学」、立命館大学	
20	丹羽一晃	アクターネットワーク理論からモア・ザン・ヒューマン・スタディーズへ：策士か？ペテン師か？ブリュノ・ラトゥールとの適切な距離を考える【ワークショップ：代表】The Routledge International Handbook of More-than-Human Studies を読む	2025 年 11 月	共生社会システム学会 2025 年度大会、大和大学	太田和彦、大場優志
21	紀平知樹	オーバーツーリズムと技術の問題：観光客の技術的制御の倫理的妥当性	2025 年 12 月	科学技術社会論学会、常磐大学	
22	郷原佳以	安住しないために——『野生の教養』をめぐって	2025 年 12 月	『野生の教養Ⅱ』合評会「カオスによる共同性あるいは基盤的アナキズム」、明治大学和泉キャンパス和泉図書館ホール	
23	郷原佳以	La sincérité et le silence chez Blanchot – en comparaison avec Merleau-Ponty	2025 年 11 月	Webinaire Maurice Blanchot、オンライン	
24	郷原佳以	四人称について	2025 年 10 月	物語論×バンヴェニスト研究会、明治大学駿河台キャンパス研究棟第三会議室	
25	郷原佳以	「カフカの」『幻想』をめぐって——戦間期の終わりにおけるサルトルとブランシヨ	2025 年 8 月	「戦間期」フランス研究会、東京大学駒場キャンパス 18 号館コラボレーションルーム 3	
26	郷原佳以	Recherches blanchotiennes sur le langage littéraire – à partir des sujets merleau-pontiens de « sincérité » et de « silence »	2025 年 6 月	Journée d'études « Maurice Merleau-Ponty et les Recherches sur l'usage littéraire du langage : situation et perspectives », École Normale Supérieure, Salle Dussane	
27	長坂真澄	Phantasia, schematisation, and eidetic seeing	2026 年 3 月	WIAS Symposium: “Transcendental Philosophy – 超越論哲学”、Waseda University	
28	長坂真澄	ジャック・デリダ『理論と実践』	2026 年 3 月	ジャック・デリダ 未刊行セミナー研究会、専修大学／オンライン	

29	長坂真澄	Architecture between Art and Technology: Based on Heidegger's Reading of Aristotle	2025 年 10 月	Active Agents: Toward a Critical Archaeology of the Architecture Discipline, Waseda University	
30	長坂真澄	τὸ ἐξαιρῶνς と隔時性——レヴィナス『全体性と無限』刊行後の関連原稿から	2025 年 9 月	レヴィナス協会第 8 回大会、同志社大学／オンライン	
31	長坂真澄	想像力と自然——メルロ＝ポンティ『自然』講義とともに辿る、シェリングによるカントの継承——	2025 年 9 月	メルロ＝ポンティ・サークル 第 31 回研究大会、東北大学／オンライン	
32	長坂真澄	Reality Preceding Possibility: Phenomenology amidst Metaphysical Transition	2025 年 7 月	Phenomenological Realism Now and Then, Okayama University	
33	長坂真澄	Dans l'abîme de l'argument cosmologique – Schelling à travers Merleau-Ponty	2025 年 7 月	Le 40e Congrès de l'ASPLF、Universidad Autónoma de Madrid	
34	長坂真澄	Tanabe and Levinas on Meta-ontology: The Autonomy of Self-Criticism qua the Heteronomy of the Ethics of the Other	2025 年 5 月	Rethinking peace: The notion of peace in Japanese philosophy (Series of workshops, University of Tübingen – College of Fellows)、University of Tübingen / Online	
35	中澤栄輔	The Development of Neuroethics in Japan: Neurointerventions and Mental Health	2025 年 9 月	Neuroethics Workshop: Theoretical and Applied Neuroethics in Asia and Beyond. Park Avenue Rochester, Singapore	
36	柿木伸之	憂鬱と叛逆——ベンヤミンのメランコリーの詩学	2025 年 11 月	国際シンポジウム「芸術・思想におけるメランコリーの現在」、立命館大学	仲間裕子、ハンス・ディッケル他
37	柿木伸之	未成の詩人とその死後の生——『ハインレ詩文集』を翻訳して	2025 年 12 月	ドイツ文学・思想シンポジウム、京都大学	小林哲也、田邊恵子他
38	柿木伸之	破局の後の想像力を拓く——ベンヤミンの批評としての美学へ	2026 年 2 月	日本エルンスト・ブロッホ研究会第 56 回研究会特別企画「ブロッホとベンヤミン」、広島市文化財団コジマホールディングス西区民文化センター	小田智敏他
39	亀井大輔	Iki and Geschlecht: Heidegger, Kuki, Derrida	2025 年 5 月	Workshop: Derrida and Japanese-Asian Philosophies, 立命館大学	
40	亀井大輔	Kuki Shūzō and Philosophical Nationalism: From the Viewpoint of Translation	2025 年 6 月	La philosophie et la question nationale, Collège International de Philosophie, フランス・オンライン	
41	亀井大輔	「いき」と「ゲシュレヒト」——ハイデガー、九鬼、デリダ	2025 年 6 月	IAJP Conference 2025、東京大学	
42	亀井大輔	デリダの終末論とシャリエ的レヴィナス	2025 年 9 月	カトリース・シャリエ『無限者の痕跡』合評会、富山大学	
43	亀井大輔	Trần Đức Thảo and Jacques Derrida: On Phenomenology and Marxism	2025 年 9 月	Workshop: Vietnam and East Asian Intellectual Currents, Fulbright University Vietnam	
44	亀井大輔	The Inheritance of Phenomenology in Derrida: on "The End of the World"	2025 年 12 月	Symposium: A Tribute to Phenomenology, 立命館大学	
45	亀井大輔	三木清『構想力の論理』における「発明」——デリダの発明論と対比して	2025 年 12 月	第 3 回「日本哲学の脱構築」ワークショップ、専修大学	
46	亀井大輔	ジャック・デリダとチャン・デュク・タオ——フッサール『幾何学の起源』をめぐる	2026 年 2 月	国際シンポジウム「二十世紀哲学における唯物論的弁証法の展望——フランスと日本、そして両者の媒介としてのチャン・デュク・タオ」、立命館大学	

47	吉川孝	倫理学における現象学的直観の意義について —シュリックによるシェーラー批判への応答を通じて	2025 年 11 月	日本現象学会第 47 回大会、岡山大学	池田喬
48	吉川孝	日本のハードコア・ポルノのクィアネス—『風立ちぬ』と『お医者さんごっこ』	2025 年 12 月	京都大学映画コロキウム、京都大学	
49	黒岡佳祐	Translation and Community: Husserl, Heidegger and Derrida	2025 年 8 月	第 8 回日中哲学フォーラム「世界哲学と古典学」、中国社会科学院	
50	黒岡佳祐	海に定位した生と他者の歓待——カール・シュミット、折口信夫、ジャック・デリダ	2025 年 11 月	2025 東アジア沿岸都市研究国際学術大会、福州大学	
51	黒岡佳祐	芸術が空間/世界を拓く時——ハイデガー・柳宗悦・ベンヤミン	2025 年 11 月	北東アジアにおける芸術創作と人文交流に関する国際シンポジウム	
52	小田麟太郎	あえて黙ることと過剰な語り——ジャン＝リュック・ナンシーにおける神話の絶絶とフィクション	2025 年 5 月	間文化現象学研究センター若手ワークショップ ナンシー『無為の共同体』の複層性、立命館大学衣笠キャンパス	
53	小田麟太郎	L'acte de la foi et le christianisme chez Jean-Luc Nancy	2025 年 10 月	若手研究者による国際ミーティング、オンライン	
54	小田麟太郎	Kant and Nancy on the Passion of Jesus	2025 年 11 月	国際ワークショップ：ジャン＝リュック・ナンシーと「ポスト宗教」の哲学、立教大学池袋キャンパス	
55	谷 徹 Tani Toru	「こと」と現象学 Koto and Phenomenology	2025 年 12 月	香港現象学会 第 47 回大会、立命館大学	
56	池田喬	倫理学における現象学的直観の意義について —シュリックによるシェーラー批判への応答を通じて	2025 年 11 月	日本現象学会 第 47 回大会、岡山大学	吉川孝
57	池田喬	なぜハイデガーが実践の記述において重要なのか —現象学的な質的研究の一つの可能性	2025 年 11 月	公募ワークショップ 日本現象学会第 47 回大会、岡山大学	呉文慧、海老田大五朗、榊原哲也
58	宮原優	「弱さ」をめぐる現象学的記述について	2025 年 11 月	フェミニスト現象学研究会 神戸大学	
59	宮原優	「乳児と親の関係をことばにすること	2026 年 2 月 14 日	トークセッション「親になること/をすること」とはどのようなことか 日本大学	朱雀花子、草津紀子
60	佐藤愛	愛とおぞましいものの共同体——ジジェクにおける〈母〉の抑圧と女性の式	2025 年 7 月	第 24 回ジジェク研究会、オンライン	
61	日暮雅夫	シンポジウム報告「勃興する権威主義——批判理論から見た戦後民主主義」in、北海学園大学	2025 年 11 月 8 日	唯物論研究協会第 48 回大会シンポジウム「戦後民主主義が見たもの／見てこなかったもの——記憶と黙殺の 80 年を問う」、北海学園大学	中野敏男他
62	鈴木崇志	フッサールとアンリの共同体論の分岐点	2025 年 6 月	日本ミシェル・アンリ哲学会第 17 回研究大会、同志社大学	
63	鈴木崇志	メルロ＝ポンティの「制度化」論と法現象学：ハムリックの解釈を手引きとして	2025 年 11 月	日本法哲学会 2025 年度学術大会、早稲田大学	
64	鈴木崇志	The Role of Phantasy in Husserl's Theory of Intersubjectivity	2025 年 12 月	International Symposium Kyoto 2025: A Tribute to Phenomenology、立命館大学	

No.	発表会議名	開催場所	発表年月	来場者数	共催機関名
1	PATHOSOPHIA	立命館大学衣笠キャンパス	毎月第二土曜日	10名	
2	ラッセ・トマセン講演会「歓待——政治的概念についての脱構築的理論化」	専修大学神田キャンパス	2025年6月	20名	脱構築研究会
3	第3回「日本哲学の脱構築」ワークショップ「三木清『構想力の論理』を読む——技術論を中心に」	専修大学生田キャンパス	2025年12月	50名	専修大学哲学会、脱構築研究会
4	国際ワークショップ「デリダと日本・東アジアの哲学」	立命館大学	2025年5月	40名	
5	国際シンポジウム A Tribute to Phenomenology	立命館大学	2025年12月	50名	香港現象学会、日本現象学会
6	国際シンポジウム「20世紀哲学における唯物論的弁証法の展望——フランスと日本、そして両者の媒介としてのチャン・デュク・タオ」	立命館大学	2026年2月	40名	京都大学人文科学研究所
7	エマニュエル・アロア教授講演会	立命館大学	2025年6月	30名	
8	Basil Vassilicos 氏講演会	立命館大学	2025年7月	20名	
9	第1回東アジア間文化現象学講演会	立命館大学	2025年10月	30名	
10	Indefinite Life between Heidegger and Derrida	立命館大学	2026年3月	10名	
11	若手ワークショップ「ナンシー『無為の共同体』の複層性」	立命館大学	2025年5月	50名	立命館大学・人文科学研究所重点プログラム「現代における間文化現象学の新展開」、脱構築研究会
12	ワークショップ「うんこの哲学」	立命館大学	2026年3月	50名	
13	ナンシー・フレイザー教授講演会・企画・司会「労働の三つの顔——ジェンダー、人種、階級の秘められた繋がり」の解明」	立命館大学創思館カンファレンスルーム	2025年11月	100名	東京大学、京都大学

5. その他研究活動（報道発表や講演会等）				
No.	氏名	研究業績名	発表場所等	研究期間
1	宮崎裕助	〔書評〕 ユク・ホイ『ポストヨーロッパ』——故郷喪失時代の「近代の超克」	『日本経済新聞』2026年1月17日	
2	宮崎裕助	〔講演〕 いまここにある平和から始まる——カントとデリダの歓待論をめぐって	『生田哲学』27号、1-12頁、2026年3月	
3	宮崎裕助	『読むことのエチカ』合評会への著者コメント	『Supplements』第5号、30-35頁、2026年3月	
4	郷原佳以	「オルフェウスの弁証法」	竹内芳郎著作集第四巻葉	2025年12月
5	郷原佳以	「「俗悪」なセイレーンになること」（桂秀実『一歩前進、二歩後退』書評）	『群像』、講談社、2025年12月号	2025年12月
6	郷原佳以	「翻訳と批評」	『ふらんす』、白水社、2025年10月号	2025年10月
7	郷原佳以	「私を試す猫の眼差し 猫と哲学者」	『ふらんす』、白水社、2025年5月号	2025年5月
8	松葉祥一	「共存在に対する暴力としての習慣的人種差別——ヘレン・ンゴ『人種差別の習慣』書評）	『心の危機と臨床の知』（甲南大学人間科学研究所）、27号、11-13頁	2026年3月

6. 受賞学術賞					
No.	氏名	授与機関名	受賞名	タイトル	受賞年月

7. 科学研究費助成事業（科研費）

No.	氏名	研究課題	研究種目	開始年月	終了年月	役割
1	有村直輝	19～20 世紀イギリスにおける想像力論の系譜: ホホワイトヘッド哲学を参照点として	若手研究	2024 年 4 月	2027 年 3 月	代表
2	宮崎裕助	共通感覚の公共的機能の研究を基盤とした「テレパシー共同体論」の構築	基盤研究(C)	2024 年 4 月	2028 年 3 月	代表
3	宮崎裕助	ジャック・デリダの脱構築思想にもとづく「歓待」の学際的・国際的研究	基盤研究(B)	2024 年 4 月	2029 年 3 月	分担
4	郷原佳以	非人称性と物語理論—非コミュニケーション理論の可能性	基盤研究 (C)	2024 年 4 月	2028 年 3 月	代表
5	郷原佳以	「戦間期」フランス思想における学際的ネットワークの多元的展開	基盤研究 (B)	2025 年 4 月	2029 年 3 月	分担
6	郷原佳以	レチフ・ド・ラ・ブルトヌヌの先駆性: その近代性と文学的後生に関する比較研究	基盤研究 (C)	2025 年 4 月	2028 年 3 月	分担
7	郷原佳以	20 世紀フランス思想におけるハイデガーとベンヤミンの受容史の解明	基盤研究 (B)	2024 年 4 月	2026 年 3 月	分担
8	川崎唯史	フェミニスト生命倫理学の方法論としての現象学の検討	基盤研究(C)	2025 年 4 月	2028 年 3 月	代表
9	長坂真澄	現代独仏現象学における形而上学的転回とその哲学史的意義の研究	基盤研究(C)	2023 年 4 月	2027 年 3 月	代表
10	長坂真澄	哲学史的連関におけるレヴィナス哲学とその現代的意義の研究	基盤研究(C)	2022 年 4 月	2026 年 3 月	分担
11	長坂真澄	20 世紀フランス思想におけるハイデガーとベンヤミンの受容史の解明	基盤研究(B)	2021 年 4 月	2026 年 3 月	分担
12	中澤栄輔	医療倫理と研究倫理における生成 AI の有効かつ安全な活用に関する実証研究	基盤研究(C)	2025 年 4 月	2028 年 3 月	分担
13	中澤栄輔	未確立医療技術等の臨床応用と確立に係る国際的な包括的倫理ガバナンスに関する研究	基盤研究(A)	2025 年 4 月	2030 年 3 月	分担
14	亀井大輔	20 世紀フランス思想におけるハイデガーとベンヤミンの受容史の解明	基盤研究(B)	2021 年 4 月	2026 年 3 月	代表
15	亀井大輔	ジャック・デリダの脱構築思想にもとづく「歓待」の学際的・国際的研究	基盤研究(B)	2024 年 4 月	2029 年 3 月	分担
16	小田麟太郎	現代フランス哲学における「定言命法」概念の受容と変容	特別研究員奨励費	2025 年 4 月	2028 年 3 月	代表
17	佐藤愛	母子の情動に関する思想史的研究	特別研究員奨励費 (RPD)	2024 年 4 月	2027 年 3 月	代表
18	佐藤愛	スラヴォイ・ジジエック思想基盤の解明——ヘーゲル、ラカン解釈を中心に	基盤研究(B)	2024 年 4 月	2028 年 3 月	分担

8. 科研費を除くすべての外部資金（政府系、民間財団、民間企業との共同研究費等）						
No.	氏名	研究課題	資金制度・研究費名	採択年月	終了年月	役割
1	丹羽一晃	鶴見和子におけるアニミズムの倫理としての共育の思想の応用研究	上廣倫理財団 研究助成	2025 年 3 月	2026 年 2 月	代表
2	丹羽一晃	環境思想家としての鶴見和子: 共育とアニミズムの倫理学	立教大学リサーチ・イニシアティブセンター 立教大学出版助成	2025 年	2025 年	代表

9. 知的財産権								
No.	氏名	名称	出願人区分	発明人区分	出願番号	公開番号	登録（特許）番号	国